

エキスパートによるRSNA 2014ベストリポート

# 1. 領域別最新動向：CT & MRIの技術と臨床を中心に 脳・頭頸部

尾崎 裕 順天堂大学練馬病院放射線科

去る2014年11月30日(日)～12月5日(金)にかけて、記念すべき第100回北米放射線学会(RSNA 2014)が開催された。12月1日(月)にはシカゴらしい冷え込みもあり、雪もちらついたが、総じて天候に恵まれた1週間であった。

「大きい」という言葉を超越した大きさがそこにはあった。中枢神経ならびに頭頸部領域だけで、Series Course (4), Special Course (9), Scientific (Paper) Session (32), Refresher/Informatics (27), Multisession Course (14) とあまたのセッションが組まれており、口演発表に至っては最高7会場で同時開催されていた。また、これ以外に質疑応答時間が設けられた展示発表と教育展示が126演題、質疑応答のない残りの教育展示が286演題に上った。

もう一度繰り返すが、これらは脳・頭頸部領域だけの数字であり、6割以上の演題申し込みを却下してなおこの量である。したがって、本学会への参加に当たっ

ては事前にしっかりと絞っておかないと、時間と人波に流されてしまい、学会の雰囲気を楽しむだけで効果的な知識の習得は難しい。

筆者は今回、Neuroradiology Seriesを中心に聴講を組み立て、空いた時間で電子発表(教育展示)や機器展示を見て回った。Neuroradiology Seriesは、脊髄、脳卒中、脳腫瘍という3つのセッションから成っており、1セッション3時間半の構成となっていた。それぞれのセッションは総説的な3つの指定講演(各25分)と、テーマに関連した一般演題(各10分、10演題程度)から成っており、一般演題を聴く前に総説の講義があるので、考察のポイントが理解しやすかった。指定講演には大御所ばかりでなく、新進気鋭の研究者も多く登用されており、個人的な印象では若手の方が論理的かつわかりやすい講義をしていた。

筆者が参加したセッションの中で最も聴衆が多かったのは、Essentials of Neuro Imaging (MSES43) という、専門分野の異なる放射線科医を含めて神経放射線のエッセンスを教えるセッション内容で、ざっと1000人強の参加があった。

一般演題の中では、頭部外傷時の実

質内損傷評価における拡散テンソル画像の有用性に関するいくつかの報告が“Daily Bulletin”(学会新聞)で注目を集めていた。また、アルツハイマー病に関するセッションでは、参加予定者全員に4週間ほど前にインターネットを用いたプレテストが行われ、自己学習の動機づけには良い方法と思われた。

筆者は、会場内で議論が白熱するような場面には遭遇しなかったが、聴衆の講演に対する集中度は一般に高く、良い緊張感が室内を支配していた。まさにクールな感じであった。

水曜午後に毎年行われる Award Winnersの発表では、Magna Cum Laude(金賞)に30演題(日本人は3演題)が選ばれたが、中枢神経・頭頸部領域はこのうち5演題を占めていた。なかでも、多発性硬化症の治療薬であるNatalizumabにより生じるPML(進行性多巣性白質脳症)についての発表(NRE175)と、新生児の脊椎の超音波検査に関する発表(NRE372)が興味深かった。

機器展示の中では、立位から臥位までさまざまな体位で撮像できる0.2TのMRI装置「G-scan Brio」(図1)に個人的には興味をそそられた。この装置はイタリアのメーカー Esaote社によるもので、すでに世界中で200台以上、本邦でも6台稼働しているそうである。日本では、いずれも整形外科の個人クリニックや病院で使われているようで、大学の附属病院をはじめとした公的病院での実績はないそうである。

\* \* \*

最後に学会全体を通しての感想として、

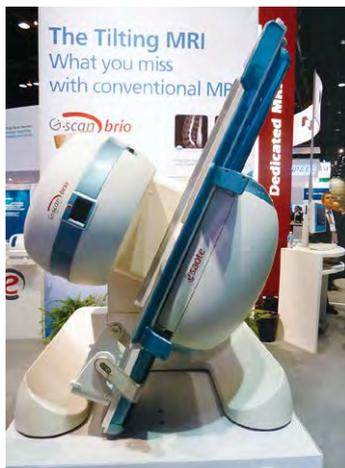


図1 撮像体位可変式MRI装置「G-scan Brio」



図2 若手研究者表彰  
48人の受賞者の中に日本人はいなかった。